

# イタリア人建築家ジャンカルロ・デ・カルロの建築・計画理論と実践手法にみられる

## 都市と建築の関係性に関する研究

The study of the relation between city and architectures through case-studying the architectural theory and the method practiced by Italian Arch. Giancarlo De Carlo

02M43171 清野 隆  
Takashi Seino

指導教官 土肥 真人  
Adviser Masato Dohi

### SYNOPSIS

In Italy hystorical center are not only well conseverd but vitalized. The purpose of this thesis is to study the methods and practices of an Italian architect Giancarlo De Carlo, who realized the best model case of Urbino.

Through this study we find as below. His method has complex and flexible structure and in the practice he took various methods according to condition. In fact, city is configured by architectures, but we consider that it is not possible to built city in a few years.

#### 1. はじめに

##### 1-1. 研究の背景と目的

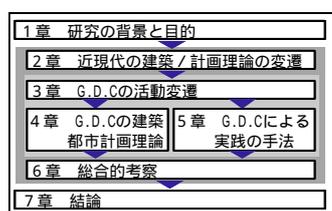
現在の日本に都市はあるのだろうか。都市と建築の関係は希薄で、危うい関係に見える。イタリアの都市では現在でも1860年以前に形成された市街地(以下歴史的都心部)が保護され、歴史的建築物が活用されているだけでなく、建築物やオープンスペースも含めた都市全体が、住民の生活の場として機能し続けている。歴史的な都市は景観の美しさだけでなく、生活の豊かさが感じられる。イタリアでは、戦後の高度経済成長によって生じた都心部の衰退に対し、「旧市街地は歴史的遺産として保存されるだけでなく、住民が生活する場として保存の対象と捉えられるべきである」という世論が生じた。これに合わせて都市計画関連制度が整備され、その後、都心部を保護する理論の構築と実践が試みられてきたことが背景にみられる。その結果、現代のイタリアでは歴史的環境に配慮する建築設計や都市計画は、もはや前提となっている。

このような背景と現状を持つイタリアにおいて、重要な役割を果たしてきた建築家の一人にジャンカルロ・デ・カルロが挙げられる。彼は自然と歴史に配慮した建築設計の実践を通して歴史的な都市を再生させており、歴史的な都市空間を維持することに貢献してきた。このような実践は、イタリアとは対照的な日本の都市の状況を正確に把握し、本質的な問題を捉えなおす必要性を示唆していると考えられる。

##### 1-2. 研究の方法

本研究では、先述のイタリア人建築家ジャンカルロ・デ・カルロに着目し、彼の 建築・計画理論と実践手法を分析・把握すること、また、彼の理論と実践から都市と建築の関係を考察することを目的とする。

2章で、デ・カルロが建築家として活動を開始する時



【図1 論文構成図】

期の建築界の動向を把握する。3章で、デ・カルロの全体像を作品と活動から把握する。4章では、デ・カルロの建築理論と都市計画理論の体系を、5章では実践手法を分析する。6章では、2章から5章までの成果を踏まえて、総合的考察を行う。【図1】

##### 1-3. 先行研究

本研究で取り上げる建築家ジャンカルロ・デ・カルロについては、イタリアをはじめとして海外では数多く研究されており、ウルビーノ都市基本計画、使用者の参加を取り入れた集合住宅設計についての研究がみられる。また、日本においては建築雑誌上で作品が紹介されるに止まっており、彼の理論と実践手法を対象とし、建築と都市の関係を考察する研究はみられない。

#### 2. 近代建築理論の変遷

##### 2-1. はじめに

2章では既存の建築史文献を基に20世紀以降の建築家が構築した建築理論を概観する。近代建築家は新しい都市モデルの構築を試みている点に着目し、CIAM(近代建築国際会議)とTeam10にみられる建築理論変遷の把握を目的とする。

##### 2-2. CIAMにみられる建築理論

1928年に設立されたCIAMでは近代建築は最小労働を実現する方法として合理的な建築生産を目指し、「生活最小限住宅」「合理的建築方法」が議題に取り上げられた。1933年の第4回 CIAM アテネ会議では、居住、労働、余暇、往来という都市の4機能が提示された。「アテネ憲章」作成を主導したル・コルビジェによって考案された「機能的都市」では都市を機能によって分節構成していた。

【表1: CIAM活動前後の主な動向】

年代	傾向	モデルと実践
1900年	初期合理主義	工業都市(1900年)
1910年		新都市(1910年)
1920年	合理主義	CIAM設立(1928年)
1930年	合理的建築/機能的都市	輝く都市(1930年)
1940年	アテネ憲章(1943年)	都市の4機能
1950年	CIAM解散(1956年)	ジャン・ド・ノイール計画(1950年)
1960年	Team10結成(1956年)	
	既存の都市や文化の存続	

## 2 - 3. Team10 にみられる建築理論

戦後の CIAM では場所の具体的な特性に対する関心が高まり、合理主義建築の抽象的な議論に対して、既存の都市が持っている性格や文化を存続させる理論が展開された。この議論を主導した CIAM の若手メンバーによって、CIAM は終焉し、Team10 が結成された。Team10 のメンバーである P.スミツンは都市の4機能に代えて、住居、街路、地域、都市という4つの基準を示した。A.V.エイクは建築に構造主義を導入した。

## 3. 建築家ジャンカルロ・デ・カルロの作品と活動

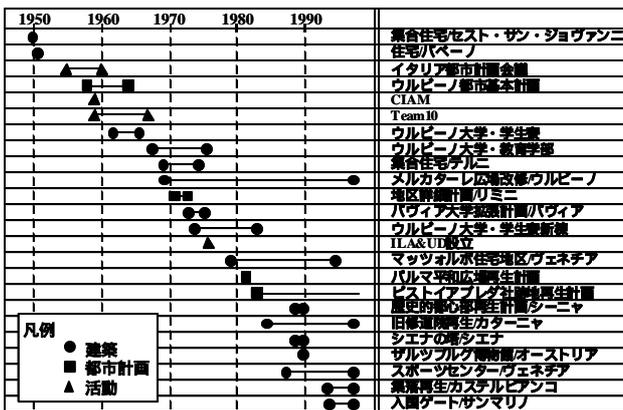
### 3 - 1. はじめに

3章では、ジャンカルロ・デ・カルロの作品集を基に作品の傾向と活動を概観し、彼の全体像を把握する。

### 3 - 2. 作品

建築家ジャンカルロ・デ・カルロは1919年に生まれ、1940年代より設計活動を開始した。デ・カルロは建築設計97件、都市計画33件を手掛けている。作品内容を見ると、1970年代前半までに集合住宅設計と都市基本計画作成に、1980年代には都市再生計画に多く携わっている傾向がみられる。代表的な作品としてウルビーノ都市基本計画とウルビーノ大学関連施設が挙げられる。デ・カルロは建築と都市計画の2つを領域としている。

【表2 作品・活動変遷図】



### 3 - 3. 活動

設計・計画作成以外の活動に着目すると、CIAM、Team10 などの建築会議、イタリア国内の都市計画会議に参加している。また、1960年代から大学教授として、建築と都市計画教育に携わっている。1970年代後半にはILA&UDを設立し、欧米の大学から教授と学生を招き、理論とデザイン研究を共同で行っている。また、執筆作品を多く残しており、建築雑誌「空間と社会」を創刊している。

キーワード	著作番号	テキスト
[ - ]	[1987-C]	建築言語が、建築に<未熟>であるけれども、日常生活の空間を改善し、改良し続けている人々の無数の創造的な貢献から孤立し、失ってしまったことによるのです。
[ - ]	[1983-A]	建築の目的は人々の活動、意図を目的とした場所を造ることである。(全ての場所が賑わっている必要はない。賑わった生活は消費の目的(道具)である。)
[ - ]	[1968-A]	形態と構造は共同体の変遷の記録である。つまり、共同体の歴史である。その美的な水準はそれを創りあげた社会の文化の記録である。形態を壊し、構造を取り替えることによって共同体の文化は取って代り、消滅し、歴史の痕跡は取って代り、消えてゆく。
[ - ]	[1986-C]	歴史的都市部は様々な建築的価値を持った建物が共存しており、分割不可能な総体である。全てが一体となって、ただ一つの文脈を形成している。
[ - ]	[1989-F]	まちは有機体のようなものである。その全ての構成要素は密接に、有機的に、他の全ての構成要素と繋がっている。1つの構成要素に作用すると他の全てに反応を持つ。
[ - ]	[1955-F]	伝統は全ての時代の文化価値が絶え間なく融合したものである。つまり、文化価値が持つ進歩的な緊張によって特徴付けられる。自由と正義という何よりの財産を増大させる質によって評価されるのである。
[ - ]	[1997-A]	変化を受け入れ、可能な限り促進する必要は大切である。それには、有効で、快適で、記憶に残る解決を考慮しながら、空間を組織し、空間に形態を与える問題に対峙すること、好奇心、繊細さ、暴力的でない、楽観的、提案的であることが大事である。
[ - ]	[1987-C]	表現の豊かさを再獲得するためには、建築は大いに刺激を必要としています。このことが私の参加する建築の信念に対するもっとも重大な理由なのです。
[ - ]	[1983-A]	計画は解釈によって始まった。解釈は、都市構造の要素を理解するのに必要である。歴史的な文献に目を通すこと、都市形成を直接観察することによって解釈は行われた。
[ - ]	[1996-C]	読むことは物理的空間に残された後を確認し、積み重ねられた層から引き出し、解釈し、整理し、現在意味を持つシステムに再編成することである。

注) 著作番号: 著作を認識するための番号 [年度 - 大文字]は著書, [年度 - 小文字]は評論を表す

【表3 抽出したテキスト数】

視点	キーワード数	テキスト数
[ ]	5	35個(15文献)
[ ]	4	27個(15文献)
[ ]	6	23個(15文献)
[ ]	5	26個(14文献)
全体	20	111個(32文献)

【図2 対象抽出プロセス】

## 4. ジャンカルロ・デ・カルロの建築・計画理論

### 4 - 1. はじめに

ジャンカルロ・デ・カルロが自ら執筆した著作を分析対象として彼の建築理論・都市計画理論を把握する。具体的には、[ ]建築観、[ ]都市観、[ ]建築計画・建築設計に関する方法論、[ ]都市計画・都市デザインに関する方法論を論じているテキストを抽出し、これを分析対象として彼の建築理論・都市計画理論を把握する。対象文献数は著作35件、評論66件である。対象著作の選定手順を【図2】に示した。抽出されたテキスト数は111個となった【表3】。

### 4 - 2. キーワードとテキスト内容

抽出されたテキストを[ ]~[ ]ごとに、その内容で分類し、キーワードを付した【表4】。以下で[ ]~[ ]の全体像とキーワードの内容を説明する。[ ]内はキーワード、()内はキーワードに該当するテキストの数を示している。

#### [ ] 建築観

建築観を表すキーワードは5つあり、[ - : 建築は人々の使用と関わる][ - : 建築は社会と共に変化する][ - : 建築は人間の活動を可能にする][ - : 建築は形態と機能の関係を一致させる]は建築の本質についての内容であり、[ - : 建築は自然と歴史に調和する]は建築のあり方について論じている。[ - ]は10個のテキストを含んでおり、特徴的であるといえる。

[ - : 建築は人々の使用と関わる](10)

デ・カルロは、本来ならば建築はそれを使用する人々によって評価されるものであると捉えている一方で、人々が建築に対して興味を示していないと論じている。

[ - : 建築は人間の活動を可能にする](3)

建築の目的は「人間の活動を可能にする」こと、人々の活動と意図を目的とした場所をつくること、合理的な社会の仕組みを具体的にすることでであると論じている。

#### [ ] 都市観

都市観を表すキーワードは[ - : 歴史的な都市は現代に対応できない][ - : 現代の都市は複雑であるが、似通っている][ - : 都市の形態は人々の活動によってつくられる][ - : 都市は様々な構成要素の総体である]の4つがみられ、1960年代と1980年代の著作を中心に論じられている。[ - ] [ - ]はそれぞれ歴史的な都市と現代の都市の現状を

【表4 テキスト内容】

対象として論じたものであり、[ - ] [ - ]は都市の本質を論じた内容であった。

[ - :都市の形態は人々の活動によってつくられる] (5)

都市の形態は「人間の経済的・社会的活動を物理的空間で具体化し、実現する」ことによって生じている過程と捉えている。都市の形態と構造は共同体の変遷の記録であり、共同体の歴史である。

[ - :都市はさまざまな構成要素の総体である] (7)

都市は建築が集合して形態をつくっていると、さらに建築の総体によって構成される街路や広場をはじめとするオープンスペースによって構成されると考えている。また、都市の構成要素はそれぞれ他の構成要素と密接に繋がっていると、「都市は有機体のようなものである」と論じている。

[ ]建築計画・建築設計に関する方法論

建築計画・建築設計に関する方法論を表すキーワードは [ :伝統を尊重しながら変化を促進する] [ :参加する建築] [ - :計画を試行的に進める] [ :建築を解釈する] [ :潜在的な活力を引き出し、現在と共存させる] [ :地域の特徴を取り入れる]の6つがみられる。[ ]は計画の進め方を論じている。他のキーワードは伝統、地域の特徴を建築に取り入れること、参加する建築を論じている。デ・カルロが建築を使用する人、建設される場所、地域の特徴を重視して、建築設計していると考えられる。[ - ]に関する内容を示すテキストが多くみられた。

[ - :伝統を尊重しながら変化を促進する] (3)

「伝統は全ての時代の文化価値が絶え間なく融合したもの」として捉えており、「伝統を尊重すると同時に変化を受け入れ、それを促進していく」ことを論じている。

[ - :参加する建築] (7)

1970年代の著作に多くみられ、3つの側面について論じている。1つ目は参加する建築のあり方についてである。2つ目にその効果についてである。3つ目に参加する建築を行う理由である。人々が自らの必要性を表現することによって建築は多くの影響を受けるとし、「建築の表現の豊かさを再獲得する」ことを論じている。

[ ]都市計画・都市デザインに関する方法論

都市計画・都市デザインに関する方法論を表す方法論は5つあり、そのほとんどが1980年代に論じられている。[ :時代に合わせて都市を変えていく] [ :都市に正確な役割を与える] [ :都市を総体的に計画する] [ :都市

を解釈する] [ :都市の特徴を維持する]の5つのキーワードが抽出された。[ - ] [ - ]という方法論は、都市を理解することによってはじめて可能となる方法論として捉えられる。[ - ]は都市計画・都市デザインに関する方法論において基本的な手法として位置付けられていると考えられる。

[ - :都市を解釈する] (6)

都市構造の要素を理解するための方法論であり、「空間に残された痕跡を発見し、現在意味のあるシステムに再編成すること」をしている。また、計画の対象となる地区を越えて行うこと、時間の制限を受けない作業であるとしている。具体的には、「歴史的な資料に目を通すこと」「直接空間を観察すること」としている。

#### 4-3. 理論の体系

[ ] ~ [ ]のキーワード同士の関係を考察した[図3]。

(1)建築観と都市観を表しているキーワードには、相互関係が見られる。建築と都市は共に人の活動を実現する形態を持つものであるという本質的な見方をもった3つのキーワードを基に構成されている。

(2)建築計画・建築設計に関する方法論、都市計画・都市デザインに関する方法論は、都市観と密接に関係する建築観、建築観と関係をもつ都市観を実現するものとして捉えられる。方法論は複数の建築観と都市観から説明される。

(3)方法論は、時代、伝統、使用者、地域の特徴、都市の特徴などの具体的な対象を得て初めて明らかになる要素を活用するという性質を持っている。

### 5. ジャンカルロ・デ・カルロの実践手法

#### 5-1. はじめに

5章では、4章で明らかにしたキーワードを基に、デ・カルロが建築設計・計画を実践した都市を建築作品の特徴と共に分析することとする。デ・カルロが介入した建築設計と計画が行われた都市を対象として現実の空間を分析し、4章で明らかになったキーワードを用いて説明する。

#### 5-2. ウルビーノについて

デ・カルロは1950年代から現在に至るまで、都市基本計画作成と建築設計をウルビーノで行ってきた。イタリア中部マルケ州に位置する丘陵都市であり、ルネッサンス期の歴史的遺産が残されている。1950年当時主要財源であった農業による経済が困難になったため、デ・カルロは計画により観光と大学活動による経済構造へ移行させた。

#### 5-3. 分析

ウルビーノの都市空間と建築を対象に特徴を記述し、その特徴が4章のキーワードとの対応を考察した[図4] ~ [図6]。また、その対応関係を建築と都市といった空間のスケール別に分類し、現実の建築や都市空間に対して、設計・計画理論がどのように適用されているのか、分析を行った[図7]。

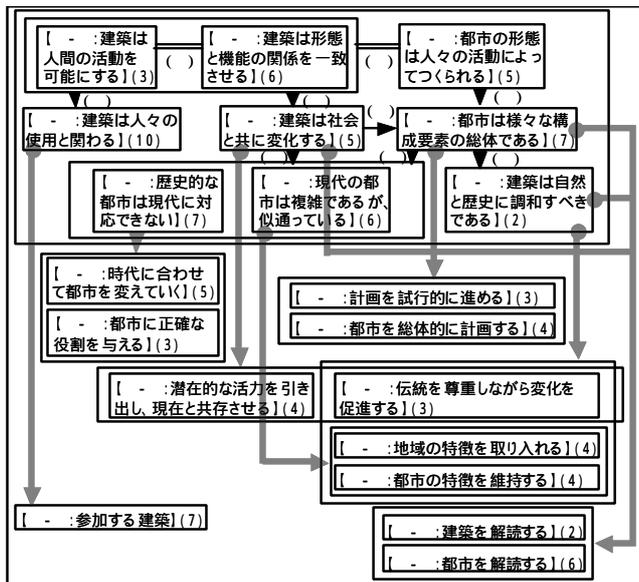
基本的な傾向として、建築に対する実践は建築観と建築に関する方法論によって説明されており、また、都市に対する実践は都市観と都市計画・都市デザインに関する方法論によって説明されている。しかし、建築に対する実践において、都市観として説明される特徴をもっていることが明らかになった。

大学関連施設設計には、都市の特徴を維持するという都市に関する方法論によって説明される実践手法が見られる。

### 6. 総合的考察

6章では4章と5章を踏まえて考察を加える。

4章からは建築と都市を本質的に捉えるキーワードを起点にして、建築観と都市観が交差するように関係をもっていおり、方法論は建築観と都市観が作り出す構造を基に導き出されていた。



[図4 理論の体系]

